

陸自駐屯地紹介シリーズ 第26回

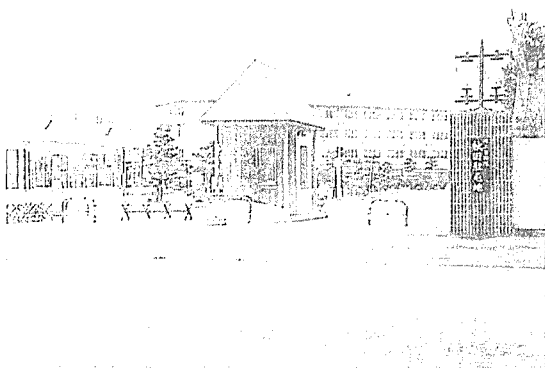
誠実と粘り強さ 秋田駐屯地

第21普通科連隊他

駐屯地シリーズ編纂委員会

懐かしい道筋

陸上自衛隊第21普通科連隊その他の部隊が駐屯する秋田駐屯地の所在地、地名「秋田市寺内將軍野」を見て「寺内將軍に縁があるのか」と尋ねる人がいる。勿論親子二代に涉って元帥の称号を受けた寺内正毅、寺内寿一將軍のことである。関係は全然ない。地名の



淵源は遠く奈良時代に遡る。当時、北の守りの最前線「鎮守府」がこの地まで進められ、鎮守府將軍が政務を執る鎮兼が駐屯地西約2kmの地にある高清水、現在の秋田県護国神社が鎮座する高台の中にあつた。この辺一帯を將軍野と呼ばれるようになった端緒である。

筆者には秋田駐屯地に個人的な想いがあることを、まずお許しを頂いておきたい。幹部候補生学校を卒業して初めて赴任し、約5年間在籍したのが第21普通科連隊であつた。

東京駅から秋田新幹線こまちに乗り、約3時間50分で秋田駅に着く。往時、上野から夜行列車に乗り約10時間を要した臆気な記憶からすると隔世の感がする。勿論駅前風景も激変している。第一に当時あつた市電がない。第二に戦後取り敢えずの復興の面影を残していた駅前の建物は完全に姿を消し大きなビル群に変わっている。第三に、時間帯もあつての事も知れないが人影

が極端に少なくなっていることであつた。だが変わらないものがあつた。秋田駅から自衛隊前を経由して走るバスの出発場所であり、昔と殆ど変わらない位置にあつて、暫く案内板に示された途中の停留所名を追つたことであつた。バスは駅前を出ると東に2km程走り山王十字路に出ると北に曲がる。この交差点から北の暫くの地域はかつて砂の原野で所々に石油のくみ出し井戸があつて、弾み車が金属性の音を出し続けていた。その影はとうの昔に無くなって住宅がひしめき合っている。さらに道を3km程走るとやがて左手に高い松林が見え始める。これが遠い昔の国府のあつた場所、高清水である。

新しく変わっているのに、無性に懐かしい。営庭、連隊本部、隊舎、無線アンテナ等の配置が昔のままだからだろうか。歩哨の丁寧な敬礼を受け恐縮しながら本部隊舎の駐屯地広報室に案内された。笑顔と予め準備された説明資料の多さに歓迎されている事を感じ、懐かしさは一段と強まった。説明によれば、駐屯地の広さは約33万平方mあり、その3分の1は農林水産省財産であつて防衛省は年間約7千万円の借地料を払っているとのこと、首を傾げなくなる話であつた。

バスはその反対側右手の2車線の道路の直線道路通称自衛隊通りに入る。両側に桜の木が植え込まれている。40年前には添え木が施されて人の背丈を僅かに超える若木であつたが、今は時期が来た時の花の美しさが想像できるまで成長していた。道は1加余り走つて、

この駐屯地は警察予備隊発足後1年6ヵ月後の昭和27年3月7日に発足し、当初は金沢から移駐した普通科大隊、高田から移駐した特科大隊の陣容であつた。29年には特科大隊は名寄に移駐し、陸曹教育隊等が創設されるなど改編を経て、昭和32年2月には新潟県高田で編成完了した、第21普通科連隊が移駐して態勢を整えた。

自衛隊営門に斜めに突き出た。ここが陸上自衛隊秋田駐屯地である。一帯もかつては海岸近く特有の昔の低い黒松が繁茂していたらしい。地形の特色からか、砂山と俗称される場所も駐屯地内にある。

まず正門と警衛所の直ぐ先に国旗掲揚塔がありこれを囲む形でロウターとなつている。その東側は長方形の営庭と朝礼台がある。営庭の南側には資料館、集会所、武道館が並んでいる。営庭の東側には医務室があり、北側には本部隊舎、1号、1号隊舎、厚生センター、隊員宿場、体育館、隊員食堂、

陸上自衛隊秋田駐屯地 営門前に立つた。主要な建物は殆ど

プール、グラウンド、整備工場が並んでいる。この他幾つかについて若干補足したい。

武道館の入り口に「武徳殿」の看板が掲げられている。武徳殿は京都にあつて高段者の称号審査や昇段試験が行われる剣道の殿堂であることは多くの人の知る所である。その誉れにあやかりたい故の命名だろうか、なおこの建物は昭和41年に秋田県警察本部の道場を解体移設したものである。

厚生センターは外形が船のデザインで採光の為のガラス張り天井や竿灯の飾りなど工夫を凝らした設計となつて明るさが感じられた。

人命救助システム格納庫は阪神淡路大震災を教訓として平成8年に作られた。一セット約1億円の災害派遣用器材が格納され、災害発生後の迅速な出勤に怠りなく備えている。

駐屯地行事等

秋田県出身殉職隊員慰霊祭

昭和43年秋以来今日に至るまで実施され、遺族、秋田県知事代理、秋田市長、秋田防衛協会会長(衆議院議員)、秋田県警察本部長等来賓約45名、航空自衛隊秋田救難隊長、航空自衛隊第33警戒隊長、秋田地方協力本部長、秋田駐屯地司令以下駐屯部隊代表、自衛隊側約120名が参列ししめやかに執行されている。県内出身殉職者は現在まで陸

海空合わせて19名の方々である。

駐屯地創立記念日

駐屯地を開放し、式典、観閲行進、模擬戦闘訓練展示、装備品展示、試乗模擬売店等で市民が賑わう駐屯地最大の行事である。予定は10月である。

自衛隊音楽祭り

駐屯地創立記念行事に関連し秋田市文化会館を会場として行われるもので、駐屯地音楽隊、第9音楽隊が出演して行っている。入場券入手にも苦労する程の賑わいとなっている。

近傍町内会合同駐屯地盆踊り

近傍町内会合同クラブ、駐屯地各部隊が踊りを競う形でおこなわれ、約5千名もの人数を集める程賑わう夏の風物詩と成っている。

陶芸「將軍窯」

最初は駐屯地の隊員のクラブ活動として発足したが、近隣の人々が参加し月2回陶芸教室として開催されている。

家庭婦人バレーボール大会

平成元年秋田駐屯地の体育館完成を契機として秋田防衛協会共催の下に開催されて以来18回の歴史を持つている。毎年12月第1日曜日に行われ18年には14チームが参加した。

竿灯祭り

竿灯祭りは桶徳を象つた竿灯を操る祭として秋田県最大であるばかりでな

く、東北三大祭の一つとして全国に知れ渡っているが、近年竿灯を操る練度は一段と向上し、参加団体が練度を競う競技会形式の色彩が濃くなつてい

駐屯部隊

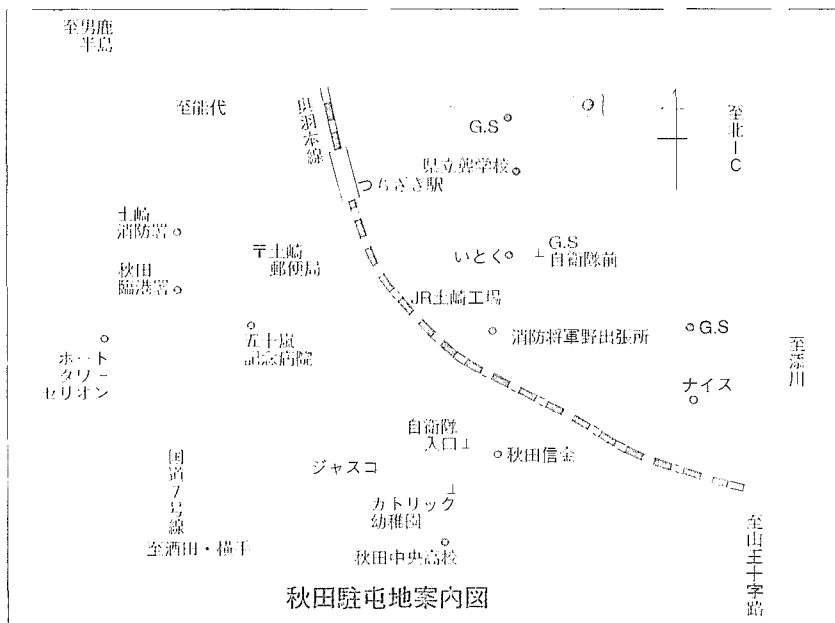
自衛隊は最適の集団である。駐屯地から出場して過去幾度となく優秀な成績を収めている。

駐屯地創立以来幾度か部隊移駐や改編を経ているが、現在は次に述べる部隊が駐屯している。

- 第21普通科連隊
- 第357施設中隊
- 秋田駐屯地業務隊
- 第383会計隊
- 第305基地通信中隊
- 秋田派遣隊
- 第105地区警務隊秋田派遣隊
- 東北方面後方支援隊第105直接支援大隊
- 第2直接支援中隊秋田派遣隊

ここに挙げた部隊の内、二、三の部隊について少々触れてみたい。第21普通科連隊

連隊は長らく第6師団長(師団司令部・山形県神町)隷下部隊であったが、平成11年3月に第9師団長(師団司令部は青森県青森市)隷下部隊に変わり、多くの実績を上げている。海外派遣任務ではモザンビーク、ゴラン高原、東チモール、イラクに要員を派遣しているが、特に平成16年末から17年初めに



秋田駐屯地案内図

かけて当時の連隊長を支援隊長としてイラク派遣に76名が参加した。出発にあたって秋田防衛協会主催の壮行会が市内平安閣で開催され、国、県、市の議員や首長を始め多くの市民が参加した。

この派遣部隊出国にタイミングを合わせて県防衛協会を初めとする協力団体は、募金して冷水器を購入し支援隊に託した。派遣地域の学校に寄付するためである。同時期にたまたま借付社も同じ企画をされた。水も満足に飲めなかつたところへ自衛隊の浄水した水が供給され、更に冷液化された水を喉にうけた幼い子供達の快感と喜びは如何ばかりであつたらうか。想像するだけでも笑みが湧くではないか。壮行会も盛会で温かい心に満ちあふれていた。

派遣に時を合わせて県民とイラクの少女に交わされた親善の軌跡がある。駐屯地の近く、護国神社のすぐ側に聖霊女子大学がある。イラクの一少女が作った詩に大学の教員が作曲し、CDとして派遣部隊に託されてイラクに渡った。日本とシステムが違うので音響システムもつけたという。その歌が撤収後の今も歌われていることを期待する次第である。

過去60回近い災害派遣では大火災、行方不明者捜索、雪害、水害、地震、山岳遭難、噴火等延べ人員約2万5千

人、延べ車両約2千500台が出勤し、勿論新潟中越地震にもはせ参じている。

民生協力の歴史の中にも目を引く事がある。他県の例にあるとおり国民体育大会、スキー等の全国大会への自衛隊の支援が行われる他に、秋田大学病院を初めとする6つの大病院移転支援が行われた事に注目したい。ご承知のようにに重篤な患者の搬送は極めて危険であり、手順違いの誤りや動作緩慢の遅れは生命の危険に繋がるため、実施する機関は一条も乱れず行動しうる精鋭でなければならぬ。この点、計画を立案し、図上演習、指揮官実設訓練、実員訓練と、順を追うごとに習熟している自衛隊は最適である。事実昭和51年の秋田大学病院での移転作戦の実力に感心した病院関係者が今日までの「病院移転なら自衛隊を」とぶう支援要請に結びついたのだと聞いた。

また連隊は師団内の各競技会においても優勝を重ねて精鋭ぶりを誇っているが紙面の関係上省略したい。
第357施設中隊

この部隊は、第2施設団(本部 宮城県船岡)隷下の部隊であり、その前身の第300地区施設隊の頃から秋田県内の部外工事に実績を重ねてきた。過疎地の道路啓開、公立学校の救地造成、全国大会級競技会のための施設の造成など、公的性格があるが地元土木建

設会社で出来ない工事を受託して地域の開発に貢献し続けてきた。

秋田駐屯地業務隊

駐屯地に一歩踏み入れた時から、徐々にほのぼのとした想いが高まってくる理山を、あれこれ考えている内に駐屯地業務隊の心配りに行き当たった。松という樹、植木という植木は丁寧に手入れされていた。聞くところによると2名の隊員が担当しているとのこと、プロも裸足の腕前である。中には銘木ではと思う一樹が本部隊舎の前にあつた。幹が根本近くから曲がって、約1mの高さを保って横に伸び、これも銘石ではと思える形の石に幹の先端を託しているのである。業務隊が隊舎維持管理に「美」を込めようとして来た長い日々の象徴であろう。

業務隊が運営する厚生センターの中には全国の駐屯地でも珍しい寿司屋があり、そのメニューも上福門、並福門と廉価で隊員の舌を楽ませて呉れる。一般に寿司店出店は厚生センターでは敬遠されがちである。隊員が嫌うのではなく、食中毒発生の懸念が業務隊を躊躇させるのであろう。しかし秋田部隊はこの懸念を克服し長い間、隊員の舌を楽しませている。財布にも痛くない価格である。表に出ない業務隊と業者の努力に思いを致したい。業務隊側は定期不定期に厳しく消毒・清

掃・調理を監督し、業者側は隊員に愛され続けるよう味と価格維持と調理技術と清潔さの維持に奮闘しているのである。

駐屯地隊員食堂には自慢したい献立がある。冬季に献立に載る「きりたんぼ鍋」とラーメンである。きりたんぼは練ったご飯をちくわ状にして焼き、これを鶏ガラと比内の地鶏、ネギ、ゴボウ、セリ等の野菜と煮込み、熱いところを食べる郷土料理で秋田県人や出身者には堪らない料理である。ラーメンは、糧食班員が麵やチャーシューから作るので手抜きのない本場の味が護られているとのことである。

隊員浴場は1時間に30人が入浴出来る広さがあり、さらに25名が入れるサウナが併設されて運営され、隊員の疲れを癒していると言ふ。また駐屯地西北にあるプールは冬でも泳げるといふ。これら個々の事例を総合すると業務隊が業務の軸足を「隊員のため」に置いて長年精進して来たことを感じ取れるのである。

駐屯地司令との瞬間
今回、幸いにも駐屯地司令(連隊長が兼務)にお会いすることが出来て、二つの事に感銘を受けた。第一は「私は秋田の隊員を、尊敬している」という発言であった。聞いた瞬間筆者の思考は激しく回転し連隊長の目をのぞき

た。

込んで視線は暫く絡み合った。分を過ぎるかもしれないが真剣勝負であったと想う、隊員に阿る色は些かも無かった。深呼吸3回程の後、自分なりに納得出来る結論を得た。これは部下隊員の律義さと忍耐力、ひたすらな任務完了の気風に最高級の信頼を寄せたに違いない。だが、指揮官が部下を尊敬できる境地に達するのは容易ではあるまい。指揮官が自らを厳しく律し、率先垂範すれば隊員は信頼してその命令指示に従い任務を完遂する。その完遂度が期待を遙かに超えている時、指揮官は部下を尊敬する状態に至るのである。筆者にも現役時代この状態に近い指揮関係を築きあげた先輩指揮官を仰ぎ見たことがある。

第二は「先輩方の御陰で我々の今日がある」という発言であった。「先輩」とは明治建軍以来の陸軍、警察予備隊発足以来の全ての先輩を指されたのであろう。実に多くの方々が、国の護りに汗を流し、涙を流し、血潮を流された事に思いをよせて、この歴史を大事にしたいとの思いを表現されていると推察された。心の底に染み入る言葉であった。

駐屯地史料館

史料館は正門の直ぐ近く左手の外柵沿いにあり、物置を改造したかのような外観の建物である。ここに入る前の

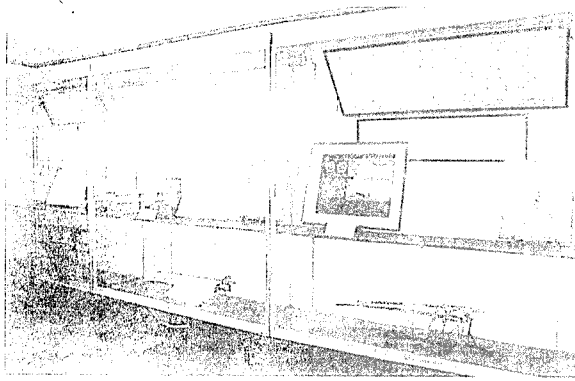
最大の関心事は陸軍3個歩兵聯隊の軍旗で、特にその展示されている位置づけに注目していた。かねてから軍旗とは兵営に入営した多くの健児の忠誠の誓いの対象であり、積み重ね積み重ねた魂の宿るところであると考えていた。故に如何に高官に縁ある物であろうとも、また高価豪華な展示物で有ろうともその軍旗より上座に位置すべき物はないとの個人的意見を持つていた。秋田の史料館には100パーセント共感できる姿で軍旗が(美観上ではあるが)安置されていた。建物の一番奥の部屋の壁には、天井まで届くガラス製の陳列棚に歩兵第17聯隊の軍旗を中心にして両脇に、歩兵第17聯隊、歩兵第23聯隊の遺物が展示されていた。美術館で重要文化財が陳列される以上の厳肅な雰囲気での展示であり、自衛官時代の昔に戻って姿勢を正し深く低頭したのである。この軍旗を陸軍戦友会から引き継いだ時の2代の連隊長の「伝統継承の辞」の扁額は墨痕褪せることなく掲げられている。この軍旗の印象故に他の展示物の印象は消し飛んでしまった。

秋田の部隊

秋田県内の出版社により出版された写真集「秋田の戦友」によれば秋田で編成された部隊は歩兵第17聯隊ばかりではなかった。列挙したい。

- 歩兵第17聯隊
- 歩兵第117聯隊
- 歩兵第23聯隊
- 歩兵隊105聯隊
- 独立歩兵第82大隊
- 独立歩兵第84大隊
- 後備歩兵第3大隊
- 追撃砲第3大隊
- 第1水上輸卒大隊
- 第3陸上輸卒大隊
- 第4陸上輸卒大隊
- 第8陸上輸卒大隊
- 第9陸上輸卒大隊
- 陸上勤務第102中隊
- 第1揚陸隊
- 海上挺進基地第19大隊

ここに掲げた部隊の歴史を伝える紙碑がある。「秋田県の戦友上、II」という2巻の文章を交えた写真集である。歩兵第17聯隊は創設以来里溝台での活躍を初めとする日露戦争の敢闘ぶりから、自らを「国軍師団」として誇っていたが、その後の中国大陸転戦にも精銳ぶりを発揮し続け、その折りの写真や、その後大東亜戦争が迫った時期に編成された部隊の写真が掲載されていた。この1巻の巻末の記述には魂の叫びが感じられて成らない。歩兵第17聯隊がフイリピンで終戦を迎えた後の悲劇と人間ドラマであり、「モンテシルバ」と云えば多くの人が知っているはずである。軍旗を奉焼した後、聯隊長藤重正從大佐(明)はその遺片を切り取って軍服の裏地に縫いつけていた。しかし理不尽にも聯隊長他幹部が戦争裁判と称するリンチにかけられたのである。理由は住民虐殺。山野に潜んだ米軍の敗残兵が住民を煽動し日本軍に攻撃をしかければ、これはもうゲリラである。それに反撃したことで、何故終戦後に裁かれなければならぬのか。在比米軍とフイリピンは正義と人道を併称したのである。実に浅ましいではないか。だが生け贄となった日本軍には気高いドラマがあった。自らの命運を悟った聯隊長は軍旗遺片を部下に託して従者として死の段を上った。同じく死の段を上った工藤忠四郎陸軍中尉は自らの命よりも同因の伊藤正康陸軍大尉(明)の無実を書き残し死訴した。この伊藤大尉は渡辺はま子さんによって長い間歌われ続けた「ああモンテシルバの世は更けて」の作曲者で幸いにも日本に帰還が叶った後陸上自衛隊に入隊し、最後は富士学校で退官された方である。長く借行社理事・総務委員長を勤められたと聞く。また巻末の祭文、碑文の2篇前の大事なスペースに、工藤忠四郎中尉の奥様工藤コウ様の手紙が掲載されている。文中一節の「悔しさと無念さに逆上する思い」の叙述を噛みしめる時、その思い



駐屯地史料館

の激しさ深さには息を飲むばかりであり表現の方法がない。

今、秋田の郷土部隊への鎮魂の思いは史料館内の軍旗、久保田城跡の「七七比島の碑」、歩兵第17聯隊兵営跡の記念碑、更に秋田県護国神社拜殿左前に建立されている「秋田県戦没者慰霊碑」などの前で受け継がれている。「我々が死んだ後、日本陸軍の歴史は誰が語り継いでくれるのか」と嘆く陸軍時代の先輩に対する無言の返答がここにあるような気がする。

伝統継承式

すでに40年近く昔の事になってしまった。昭和44年2月2日、駐屯地で

一つの儀式が挙行された。儀式の名前は「伝統継承式」。陸上自衛隊の服務法規の何処にも記載されていない儀式である。この儀式は陸軍秋田歩兵聯隊の勇武の伝統を陸上自衛隊第21普通科連隊が引き継ぐことを精神とし、式次第にはその象徴として明治以来戦火を潜り抜けてきた歩兵第17聯隊、歩兵第17聯隊、歩兵第23聯隊の軍旗を連隊に引き継ぐことが組み込まれていた。受け取る自衛隊側の時の連隊長下山一郎(一等陸佐以下連隊員は全員武装して営庭に整列していた。一方、儀式開始時、駐屯地教場に到着し安置してあった軍旗(正確には3枚の軍旗遺片入り額)は戦友会の主要メンバーに護られ、連隊の3人の幹部に捧持されその周りを部隊で編成した護衛小隊に囲まれて式場に運ばれ、国歌奏楽、着剣捧げ銃等の一連の式次第を経て自衛隊に引き継がれたのである。当時筆者は第21普通科連隊所屬であり、軍旗護衛小隊長としてこの式典に臨んでいた。「絶対に先輩方を失望させな」と式典を司会する第1係主任(現在の第1科長)の厳命があった事もあって前日猛訓練を重ね、式が始まる前は自信があったのだが、戦友会メンバーの鋭い視線を感じ、全身緊張の頂点にあった。また、今でも残念でならないのは、郷土部隊については日露戦争の黒溝台攻防の敢

闘ぶりこそ臆気な知識を持っていたが、大東亜戦争に敗れて外地で奉焼した時の慟哭、また、自らの命が絞首台に果てること覚悟しながら、軍旗の遺片を故山に送り届けるため知謀をこらした聯隊長及び團近持校のこと、隠匿を密告して自らの運命を逃れようとした者など一人として居なかったこと等については知る由もなかったことである。もし知っていたならば、護衛している対象を「軍旗遺片」と云う大事ではあるが一つの品物」としてではなく、明治以来の護国の歴史の中で、戦死された方、帰還された方の魂が籠ったかけがえの無い象徴として、自身ばかりでなく全霊の誠をもって護衛小隊長としてご奉仕をしたであろう。資料にめぐり会ってこの事に気づくまで実に40年近い歳月が過ぎたのである。

終えるに当たり今回も靖國偕行文庫から貴重な蔵本を借用し、元文庫室長大東信祐氏陸自訪から啓示を頂いたこと、秋田駐屯地広報室長金田芳彦氏、秋田地方協力本部鈴木正一氏、秋田県隊友会事務局長根田芳幸氏には見学に際して大変お世話になったことに感謝したい。また今回は異例のことであったが駐屯地司令湯浅一佐に見学のお礼を述べることができた。お忙しい中時間を割いて頂いた事に感謝するばかりでなく、筆者が本稿を記述するまでの

信念となる二つの考えを頂けたこと心から感謝したい。

文責 松村興延陸自64



隊員浴場



隊員居室